

いばらの姫は目覚めを望まない

### プロローグ

それは、ひなたがおつかいで仕事の書類を郵便局へ出しに行った帰りのこと。

彼女の働く会社は、東京湾沿岸の埋め立て地帯——高層ビルやマンションが立ち並ぶ地域にある。本社だけでも従業員が一千人以上いる、外資系の大手医療機器メーカーだ。三十階建てのビルは、二階にカフェのテナントが入るのみで、残りはすべて専有になっている。

その社屋のエントランスロビーを歩いていたら、足下でキラリと光るものに気付いた。

偶然、視界に飛び込んできたそれは、淡いブルーのスクエアカットされた石。拾い上げてみたところ、シックなデザインのカフスポタンだった。

（やだこれ……誰のだろう。それに結構高そうな）

周りを見渡すと、広い吹き抜けのロビーには、こんなボタンを着けていてもおかしくなさそうなスーツ姿の男性が、あちこちにいます。

（受付に言づけて、うちの課でお預かりかな）

社内の遺失物は通常、一定期間受付で預かった後、総務課の庶務窓口へ届けられる。その窓口を担当しているのが社会人二年目の彼女——原田ひなただ。

片手にカフスを握り込み、ひなたは受付カウンターに向かった。すると、背後から大げさな嘆きの声が上がリ、思わず振り返る。

そこには頭を抱えながら手首を指して『カフスがない!』と訴える年配の男性がいた。彼は明らかに日本人ではない外見をしている。金髪に緑色の瞳。しかも叫んだ言葉は、美しい発音のフランス語だ。

幼い頃同居していた祖母が日系のフランス人だったため、ひなたの家の中ではしょっちゅうフランス語が飛び交っていた。おかげで、彼の言葉もスムーズに聞き取れる。

金髪の男性は、うちの社員だと思われる同伴者に、カフスがいかに大事な物なのかを切々と訴えていた。

(奥様からのプレゼント)

流暢なフランス語に聞き入ってしまい、ぼうつとしていたひなたは慌てて自分の手元を見る。

「あつ、これ!」

ひなたは足早にその男性に近付き、フランス語で声をかけた。

『こんにちは、ムッシュー。落としたのはこれですか?』

驚いた顔をして振り返ったのは、その男性と、もう一人——役員秘書室の室長補佐、宮村颯介だ。

(あ……この人、宮村さん)

ひなたが彼と口をきいたことは、入社してから一度もない。

それでも彼のことを知っているのは、かなりの有名人だから。秘書室といえば、社内でも特に有

能な人材が集められた、エリート集団だ。中でも彼は、三十代前半という若さで秘書室のナンバー2の座につく、とびきりのエリート。しかも独身で、見た目も抜群にいいときている。

そのため、ひなたのように他人に関心のない者でも、顔と名前くらいは知っていた。

『わあ、これだよ僕のカフス! ありがとう、かわいいお嬢さん!』

ひなたの差し出したボタンを見て、金髪の男性は、抱きつかんばかりに感激を表した。けれども彼女は、他人に触れられることが極度に苦手なのだ。逃げ腰になりつつ、なんとか笑みを作ると、彼の手にボタンを握らせ、パッと手を離れた。

『もう落とさないで下さいね。さよなら!』

そう言って背中を向け、ひなたは駆け足でその場を後にする。そして、タイミングよく開いた受付横のエレベーターに飛び乗った。

扉が無事に閉まって、ホッとす。ひなたはいつものように隅へ寄り、人にぶつからないよう小さく身体を縮こまらせた。

ボタンの持ち主がどんな人だったのかはわからない。だが、宮村が同伴しているくらいだから、きっと大事なお客様なのだろう。

フランス語で会話ができる機会など滅多にないから、もつと話したい気持ちもあった。

でも、あんなに目立つ場所で、あんな派手な二人と一緒にいたら、余計な注目を浴びかねない。そんなのは、まっぴらごめんだ。

「——颯介、あのお嬢さんはうちの社員？」

宮村颯介は、突然現れた女性が完璧なフランス語で話しかけてきたことに驚きすぎて、固まっていた。しかし直属の上司であるエリックから流暢な日本語で話しかけられてハツとする。

「そうですね……知り合いではないので名前はわかりませんが、うちの制服でしたので」

「とても綺麗なフランス語だったね。それによく見ると、すごく美人だったよ」

その言葉に、颯介は首を傾げる。

（あれが、美人……？）

突然フランス語で話しかけてきた彼女は、目元が半分隠れるほどの長すぎる前髪に、ひつつめ髪と銀縁メガネ。全体的にとっても野暮ったく、暗い雰囲気だった。

「顔を見る暇もなく、いなくなってしまったからね。また今度会ったら、よく見てみるといい。肌も髪も瞳もとても綺麗で、整った顔をしていたよ。僕好みだった」

「……そうですか」

エリックもまた大方のフランス人男性同様、女性を見れば「美しい」「かわいい」「とても好みだ」と口にする。だから颯介は、その言葉もあまり本気で受け取らなかった。

エリックは、彼女が乗っていったエレベーターの方向を見つめて微笑む。

「あのフランス語はいいね。……また会いたいな」

その言葉に込められた意味を、颯介は正しく理解して頷いた。

「あなたが日本に戻られる時期に合わせて調整します」

そう答えるとエリックは嬉しそうに笑い、正面玄関で待たせている運転手のほうへと優雅に歩き出した。

## 第一章

数日後の朝。ひなたは出勤早々、上司である総務課長に呼ばれ、「すぐに三十階の会議室へ行くように」と言われた。

怪訝に思いながらもエレベーターに乗り、最上階の三十階で降りる。すると、ひなたはローヒールの靴底の感触がとても柔らかいことに気付いた。低層階の床は歩くと靴のかかどがコツコツ鳴るが、ここでは敷かれた絨毯に音が吸収され、やけに物静かだ。

彼女はそこで、なにやら嫌な予感に襲われる。

本社ビルの上階は、特別なエリアだ。二十七階には役員秘書室が、そして二十八階より上には、重役室と役員専用の会議室がある。一般社員は、まず立ち入らない場所だった。

（私がこんなところに呼び出される理由って……）

ひなたには、心当たりがなくもない。

「昨日、彼女のいる庶務係を、あの宮村颯介が突然訪ねてきたのだ。たまたま窓口に出たひなたを見て、彼は「あっ！」と叫んだ。驚いて奥に引っこまわしたら、彼は慌てて自分を呼び止めて言った。『ずっと君を捜していたんだ』と。今日の呼び出しはきつと、彼からだろう。」

ひなたは、誰もいない廊下に佇み、銀縁の伊達メガネを指で押し上げて、ため息を吐く。そして長い前髪を下ろし、顔を見えづらくした。彼女は、わざとサイズの高い制服に身を包み、身体も隠している。

——極力地味にして、絶対に目立たないこと。それがひなたの信条。

社内でも有名なエリートのが、自分に一体どんな用事があるのか。ひなたは考えたくもない。彼が訪ねてきた時も、ろくに話を聞かず、窓口の背後にある衝立ての奥に引っこ込んでしまった。

今、彼女が望むのは、必要最小限の言葉で会話を切り上げ、庶務係の部屋へ帰ること。ただそれだけだ。

大仰なドアが並ぶ長い廊下を抜け、奥まった場所にある会議室のドアの前に立つ。

ひなたは、微かに震える指先をギュッと握り込み、目の前にあるドアをノックした。

「……………」

あると思った返事がない。

彼女はゴクリと唾を呑み、もう一度ノックする。と、同時にドアが部屋の内側へ、わずかに開いた。

「来たね」

ドアの細い隙間から颯介が、意味深な笑みと共に顔を出す。そして迎え入れるように大きくドアを開け放した。

「待ってたよ、原田さん」

まるで、罨の中にそれとわかっていながら入る気分だ。だからと言ってもう、逃げる術はない。背の高い彼の横をすり抜けて中に入ると、部屋の奥——景色が一望できる大きな窓の近くに、あの日ロビーで少しだけ言葉を交わした、金髪の年配男性が立っていた。

ひなたがその場で足を止めたら、颯介にうしろから優しく背中を押された。

「もつと前に」

耳元で艶のある彼の声が響き、ひなたは、ぞくつとして飛び上がる。それからパッと振り返り、片手で耳を押さえながら、無言で颯介に抗議の視線を向けた。

それを見た彼は、一瞬目を丸くしてから、可笑しそうに微笑む。

（なんか……ちよつと違つたかも）

ひなたは颯介に対し、紳士的でも優しいイメージを抱いていた。だが、実際に彼と接してみて、意外に意地悪で、感情を素直に表すタイプなのかもしれないと思いは始める。

ひなたは気を取り直し、言われた通り前に出た。すると、金髪の男性は満面の笑みを浮かべて、

こう言った。

『ようこそ美しいお嬢さん。私はエリック・ダルシ。今日から君のボスだ。エリックと呼んでくれるかな』

(は……?)

ひなたはポカンと口を開け、あの時と同じ美しい発音のフランス語を発した、目の前の男性を見つめる。

今、なんと——?

そのまま呆まうけていると、颯介が前へ出てきて、ひなたの横に並んだ。

「なにを言われたか、わかった?」

横に立つ颯介を見上げ、ひなたは眉間みげんにシワを寄せる。

「わかりません」

「それは……言葉が聞き取れなかつたって意味じゃないよね?」

ひなたはしかめ面ぢらをしたまま、訊きねた。

「ボスって、どういうことですか?」

その途端とたん、エリックと颯介は揃そろって笑みを浮かべ、頷うなずき合う。

「合格ですね」

「ああ。颯介、早速手続きに入ってくれ」

「承知いたしました」

(ん?)

なぜか普通に日本語でやり取りする二人を見て、ひなたは目を丸くした。背中には、冷や汗がうっとうと流れる。

(なんか私、間違っただけ……)

おそらく二人は、ひなたがフランス語をちゃんと聞き取れるか試したのだ。その証拠しよこに、エリックはとても早口だった。

『お嬢さん、あなたの名前を教えてください』

エリックがフランス語でふたたび話しかけてくる。

ひなたは戸惑い、うつむいたが、今さら遅いと諦あきらめて、わずかに顔を上げた。

『ひなた・原田です。……ひなたとお呼び下さい』

すると、彼は満足げに笑って言った。

『では、ひなた。君は今日から僕の第二秘書だ。必要なことはすべて颯介から学ぶように』

なぜこんなことになったのか——

あの時、エリックを困っているお客さまだと思つて、咄とつ嗟さにフランス語で話しかけたのが運の尽きだった。

会議室を出たひなたは颯介に連れられて、そのまま二十七階にある役員秘書室へ向かうため、エレベーターに乗った。

秘書室は、社内の各部からは独立した部署である。専任の秘書が付くのは常務取締役以上だが、その他の役員をサポートするためのグループ秘書もいる。

颯介は、専務取締役兼最高マーケティング責任者、エリック・ダルシCMOの専任秘書。つまりエリックは、お客ではなく、この会社の重役だったのだ。そのことをまったく認識できていなかったひなたに、颯介は呆れかえった。

フロアを移動がてら、ひなたは彼からエリックのことを簡単に教えてもらう。

エリックは日本在住のフランス人で、母国語はフランス語だが大変流暢な日本語を話す。とても愛妻家で、日本人である奥さまは別の会社を経営しているらしい。

(専務の顔くらい、ちゃんと覚えていたら、こんなことには……)

話を聞きながら、ひなたの頭の中には繰り返し後悔の念がよぎった。

二十七階でエレベーターを降り、二人は役員秘書室のガラス扉の前に立った。颯介はセキュリティイがかかった扉横の壁にあるカードリーダーに、胸ポケットから取り出したIDカードをかざした。ひなたは、その彼の姿をぼんやりと見つめる。

高い身長に伸びた背すじ、長い手足、スーツの袖口から覗く手首や、長く骨張った指。彼は全身に、男性らしい美しさと色気を漂わせていた。

ひなたは警戒しながらも、それらに無意識に見惚れてしまう。

ほどなく颯介が扉を開けたので二人並んで部屋に入る。途端、そこにいたメンバーから鋭い視線を一斉に浴びせられた。

ひなたは内心悲鳴を上げる。彼女には、とあるコンプレックスがあり、他人に見られることが苦痛で仕方ないのだ。

部屋の中には向かい合わせに並んだデスクがいくつもあり、そこに座っているのは大半が女性だった。皆、制服ではなく華やかなスーツを着ており、髪は丁寧に巻いている。中には驚くほど濃いメイクの人もいた。

颯介は視線を気にする様子もなく、奥にある秘書室長のデスク前に進んだ。そして、とても大柄な男性に声をかける。

「大谷室長。彼女が、今日からダルシCMOの第二秘書になった、原田ひなたさんです」

颯介がそう告げると、部屋の空気が一瞬で変わった。周囲の視線が、さらに鋭くなったのを感じる。ひなたは居たたまれず、その場で身を縮こまらせて小さくなり、うつむいた。

「ああ、やっと見つかったのか」

場の空気を無視した、あからさまに呑気な口調で、大谷は笑う。

「本当に苦労しました。社員調書に書くべきことを書いていなかった、誰かさんのせいで」

颯介の視線を感じ、ひなたはおそるおそる顔を上げた。すると目が合った彼は、不貞腐れた表情を見せる。

「後で再申告させるからな」

(……なんのこと?)

ひなたが怪訝な顔をするのを見て、大谷は面白そうに笑った。

「颯介に弟子ができたか。有能な男だから、いっぱい勉強するといよいよ、原田さん」

急に話しかけられ、ひなたはビクツとしてうつむき、固まった。それを見た颯介が、今度は不機嫌そうに呟く。

「返事」

(え……?)

ふたたび顔を上げると、颯介はひなたをジッと睨みつけて言った。

「室長に返事は？」

ハツとして大谷に向き直り、ひなたは頭を下げる。

「は、はい……よろしくお願い、します」

初めは普通に声が出たものの、徐々に消え入りそうなほど小さくなってしまった。その様子を見て、颯介は大きなため息を吐く。

「一から叩き込むしかないな。来いよ、ひなた」

(ッひなた……? いきなり呼び捨て?)

驚いて目を丸くしたのは、彼女だけではなかった。部屋にいる大半の人間が、同じように驚愕の表情をしている。

しかし周囲になど一切構わず、颯介は、この部屋の端に設置されているスモークガラスに囲われた打ち合わせブースに入ってしまった。

背後に不穏な空気が漂っているのを感じながら、ひなたは慌てて彼の後を追った。

奥の席に颯介が座り、ひなたは彼の向かい、ドア寄りの椅子に座ることにする。ひなたが移動する間、彼はそれをジッと見つめ、彼女と目が合うと、微妙な顔をした。

(なんだろう……?)

簡易ブースとはいえ、密室に二人きり――

ひなたは緊張しながら、新たに直属の上司となった颯介と向き合う。

彼の話は、まず苦情から始まった。

「君の社員調書、見せてもらったよ。外大を出て入社二年目。英語が得意とは記載がある。でも、フランス語については書いてない。普通に会話ができるレベルにもかかわらず。うちは外資系だ。外国語の習得レベルについては、詳しく申告するよう指導されているはずだけど？」

ひなたは気まずさを感じて、うつむいた。

先ほど大谷の前で彼が言っていた『社員調書に書くべきこと』とは、これだったのだ。確かにひなたは、フランス語が得意なことを「わざと」書かなかった。

英語が話せる社員はたくさんいるから、書いてもきつと大して目立たない。でもフランス語が話せる社員が珍しいことはわかっていた。

「おかげで、あれから君を探すのに酷く苦労した。もう諦めようかと思った頃、庶務にも一応聞いてみようと思って行っただ。それで運よく見つかったからいいもの……」

ひなたは普段、窓口には滅多に出ない。だが、あの日は、たまたま他に人がいなかったのだ。

本当についてない——思わずため息を吐くと、それに気付いた颯介が、眉根を寄せて言った。

「君にとっては不本意かもしれないけど、どうにもならないよ。諦めて、できるだけ前向きに取り組んでほしい」

確かに不本意だ。庶務課では、人と話をするのが苦手であることや、人前に出るのは、もつと苦手だということを理解してもらい、おつかいや裏方の雑務に徹してきた。社内行事や飲み会にも一切参加しない。周囲には変わり者だと思われていたかもしれないが、ひなたは、それで全然構わなかったのに。

それがいきなり、社内外の多くの人と接する秘書室へ異動になるとは……

「君の仕事は、主に俺のサポートだ。スケジュール管理と、文書作成。それと、エリックがたまにフランス語で喚くから、必要だと思ったら通訳してほしい」

(喚く……?)

怪訝な顔をしながらも、ひなたは彼の顔を見ずに頷いた。颯介は、英語と中国語の会話には困らないが、フランス語は苦手らしい。

チラリと彼を見たら、すぐに目が合った。颯介の強い視線が、自分から片時も離れないことに気が付き、ひなたは困惑してうつむく。

「一つ、聞いておきたいことがあるんだけど」

颯介がそう切り出し、ひなたは、またわずかに顔を上げた。

「その長い前髪とメガネを、もう少しどうにかできない？ 話をするのに、相手の目が見えないと

いうのは……」

「無理ですっ！」

ひなたは、ここに来て初めて大きな声を上げた。颯介が驚いて目を丸くする。

第二秘書になるということは、エリックや颯介と行動を共にする機会が、これから多々あるのだろう。人付き合いが苦手だなんて、とても言っていられなくなる。そんな状況に置かれた上、最も避けたいこの顔を晒すことになるなんて——

想像するだけで、ひなたは憂鬱を通り越し、胃が痛くなった。

ふたたび下を向き、黙り込む彼女を、颯介はなんとか説得しようと試みる。

「ひなた。君はエリックの専任秘書だ。彼のためにも、もう少し外見には気を遣うべきじゃないかな」

だが、ひなたは頑として見た目を変えることに同意しなかった。

「嫌です」

「……TPOって知ってる？」

颯介も最後は、なれば呆れ気味だった。でも、ひなたは退職も辞さないほどの覚悟で抵抗し、結局は彼のほうが折れた。

打ち合わせブースから出る時、ドアのところ立った颯介が、それを開ける直前にこうささやいた。

「なんで隠したいのかわからないけど、もつたいないな」  
彼の前を通り過ぎようとしたひなたは、思わず足を止める。

「君に初めて会ったあの日、エリックが言ってたんだ。『とても美人だった』って。俺は正直、そうは思えなかったんだけど……」

そう言っただけは前屈みになり、顔を覗き込んでくる。

ひなたはゴクリと唾を呑んだ。心臓がバクバクし、緊張や不安を急激に掻き立てられる。

「やっと、意味がわかった」

（意味って……？）

固まるひなたの肩を、彼は軽くポンと叩いてから、ドアを開けた。

「誰にも言わないよ。ただ……」

（ただ？）

警戒心も露わなひなたに、颯介は意味ありげな笑みを浮かべて言う。

「その前髪とメガネは、どうにかしてほしいな、やっぱり」

「嫌です！」

反射的に答えて、ひなたはハツとする。またしても秘書たちの視線を集めてしまっていることに気が付き、震えながら下を向いた。

すると颯介は、それらの視線から庇うように立ち位置を変え、優しい声でささやく。

「エリックの部屋を案内するから。おいで」

彼はその大きな身体を盾にしたまま、ひなたを部屋から連れ出した。

自分でもどうかと思うほど、今のひなたは慣れない場所に怯え、縮こまっている。そんなひなたに対して颯介は、変わらず優しい態度を取り続けてくれた。

（内心、呆れられているのかもしれない）

ひなたは自己嫌悪を感じ、唇をキュッと噛みしめた。

\*

迎えたその週の最終日。ひなたにとつて、金曜日の夜は特別だ。

仕事を終え、帰宅してから念入りにメイクをして、着替えて出かける。

選ぶのは身体のラインが出るタイトなトップス。そして短い丈のスカートか、ショートパンツ。好きなファッションテーマは「かわいいくてセクシー」だ。

でもそういう格好をして夜の街に一人で出る勇氣はないので、出かける時は必ず親友のカレンと一緒にだった。

カレンは、ひなたが就職したばかりの頃に街で声をかけてきた男の子。

——そう、男の子だけどッカレン”。

美容師兼スタイリストの彼は、中性的な容姿に、ベリーショートでグレーがかかった緑色の髪をしている。細身でタイトなシャツとパンツを好んで着ており、話し口調は女の子みたいだ。かといっ

て同性が好きとか、自身の性別認識が違うとか、そういうことではないらしい。

そんな容姿や雰囲気相まって、成人男性が全般的に苦手なひなたでも、カレンが相手だと身構えなくて済んだ。それに、カレンは他人との線引きがハッキリしているから安心して付き合える。彼はとても人懐っこいが、一定以上は決してこちらに踏み込んでこない。加えて、物事を包み隠さず言ってくれるので、腹の探り合いをしなくてよかった。

街で初めて声をかけられた時、彼は、ひなたの全身をジロジロ眺めてこう言った。

『あんたそれ、わざとやってんの？』

カレンは開口一番そう言っつて、ひなたを驚かせたのだ。彼はパツと見ただけで、ひなたの「擬態」を見破った、初めての人だ。

ひなたは元々、おしゃれが大好きな女の子だった。

小学生の頃、母の目を盗んで勝手に化粧品を使つては『子どもが化粧なんかするもんじゃ無い』とキツク叱られた。こつそり塗つたマニキュアが先生にバレないように、いつも指先をぎゅつと握り込んでいたら、それがそのままクセになった。

幸か不幸か、ひなたの容姿は異性からは称賛の、同性からは羨望の眼差しを受けるものだった。

大きな目に通つた鼻すじ、ふつくらした唇にキメの細かい白い肌。小さな顔に、華奢な骨格。でも出るべきところは出た、女らしい身体つきに、真つすぐ伸びた長い足――

ただ年頃になった彼女は、自身の外見やまどう雰囲気があるみる変わる変つていくのに対し、まだ精

神的な成長が追いついていなかった。自分が、性を意識しだす思春期の男子からどう見られているのかを、ほとんど理解していなかった。

おしゃれやメイクをするのは自分だけのため。手間をかけて見た目が変化するのは、単純に楽しかった。

色恋に疎いひなたにとって、歳の近い男子は友達でしかない。だが、相手もそう思っているとは限らなかつたのだ。

それを否が応でも意識せざるを得なくなつたのは、ひなたが中学一年の時。

当時女子バスケット部に所属していたひなたは、二歳年上の男子バスケット部の部長に気に入られていた。周囲から見れば、彼がひなたに特別な感情を抱いているのは丸わかりだったらしいが、ひなたは気付いていなかった。

その年の夏の大会に敗れ、三年生が引退した後すぐの夏休み。

中学校の校舎に男バスのメンバー数人と、女バスの何人かが集まり、打ち上げをしようという話になった。

メンバーはバスケット部内でも特に仲良くしていた男女で、男子は全員三年生。女子は三年生数人と一年と二年のうち、先輩たちに気に入られていた子数人だ。

ひなたも男バスの部長に呼ばれ、あまりよく考えず、楽しそうだなと思つて参加した。

集まつたのは夕方。校内には入れないから近くの河原で花火をしようと言われ、ひなたと部長以外の皆は買い出しに行くと言い出した。それは部長の気持ちを知つていた皆が気を利かせ、ひなた

たちを二人きりにする作戦だったのだ。

学校の敷地裏の空き地で、ひなたは彼と二人きりになった。特に警戒することもなく、ただいつものように世間話をしていただけだ。

だから、なにが彼の気持ちの引き金を引いたのかは今でもよくわからない。気がついたら座っていたコンクリートの上に押し倒され、無理矢理唇を塞がれていた。

背後に感じる、硬くて冷たいコンクリートの感触。押し倒された時にぶつけた後頭部の痛み。そして生温く湿った唇の感触――

すべてが気持ち悪くて、ひなたは必死に抵抗した。でも身体の細い女の力では、体格のいい彼に敵うはずもない。

その時、バタつかせた膝が、たまたま彼のみぞおちに入った。彼は呻きながら、掴んでいたひなたの手首を離す。偶然にもその時、周辺を見回っていた中学の教師が、二人を見つけて声をかけた。

ひなたがその教師に助けを求めたことで、このことは小さな事件になった。

後日、教師たちに事情を聞かれた時。信じられないことに彼は、「ひなたが誘った」と答えた。

周囲の女子たちも、彼の好意は明らかで、ひなたがそれをわかっていなかったはずはないと言った。しかも、ひなたは普段から男子に媚びを売り甘えていたから、彼が受け入れられていると誤解しても仕方ないと答えたのだ。

ショックだった。そんなつもりがまったくなかったから、ひなたは深く傷付いた。

なぜそんな風に言われるのかわからない。自分は気付かなかっただけで、本当は皆に嫌われているのだろうか。それとも自分の態度は、本当に異性を誘っているように見えるのか――

ひなたはそれまで、人目をあまり気にしたことがなかったが、この事件をきっかけに、人から見られることを恐いと感じるようになってしまった。

着飾ることもせず、休みの日も薄い化粧さえ一切しなくなった。でも制服を着て歩いていると、それだけで色々な男に声をかけられる。

高校生になると事態はさらにひどくなった。ナンパに乗じてどこかに連れ込まれそうになったり、学校の前で待ち伏せされたりもするようになる。

それが人より多少華やかな外見のせいだと、その頃にはいい加減気付いていた。でもあの事件以来、性的な事柄には嫌悪感しか覚えなかったひなたには、誰かからアプローチされること自体、迷惑以外の何物でもなかった。

そんなひなたに転機が訪れる。高校二年生になったある日、突然両親から転勤に伴う転校の話がされたのだ。

ひなたは、チャンスだと思った。静かで、心穏やかな生活を取り戻すチャンスだと。

これをきっかけに、彼女は「擬態」を始めた。

前髪を長く厚くして大きな瞳を隠し、さらに堅苦しい印象のメガネをかける。髪型は三つ編みにするか、一つに束ねるだけの地味なものに。そして服は、体型の隠れるシルエツトに、流行りを無視した組み合わせを心がけた。

基本的に人を信用できないから、友達はいらなかった。誰とも必要以上に話をせず、たまに口をきいても、暗い喋り方で陰気な雰囲気醸し出し、他人を拒絶した。

この擬態を始めて、もう長い。

大学卒業後は、人と会わずに済む仕事に就こうと考えた。語学が得意だったこともあり、翻訳家になりたいと思っていた。だが、社会経験もなく、専門性もないため、生計を立てるのは難しい。

それにフリーランスでやっていくのに人と会わずに、というのは無理がある。営業力もコネもない新卒では仕事を取るの困難だと諦めて、ひなたは普通に就職活動を始めた。

擬態したままで面接を突破するのは難しかった中、唯一内定を取ることができたのが今の会社だ。人と極力接しないようにしてきたせいで、ますます他人が怖くなっていったひなたは、会社でも自分を守るための擬態を続けている。でもたまにふと、自分はいつまで自分を偽り、一人で生きていくのだろうと考えることがあった。

カレンに出会ったのは、そんな風に考え出した矢先だ。そうしてひなたは彼に説得され、金曜日だけ一緒に外へ出かけるようになった。

その時だけは好きなように自分を着飾る。好きな服を好きなように。メガネを外し、化粧もして。この夜の『おでかけ』は、カレン曰く、リハビリだそうだ。

本来の自分から逃げて、擬態という藪の中に逃げ込んだひなたが、もう一度自分に還るため

の――  
だが、華やかな自分と擬態している自分。一体どちらが本当なのか、ひなたには、もうよくわか

らなくなっている。

表参道の夜のカフェ。ひなたとカレンは、ゆったりしたソファの上に足を伸ばしながら、お茶を飲んでいた。

夜出かけることには、もうだいぶ慣れてきた。それに、薄暗い店内では、人目もあまり気になら

ない。  
「ひなた。今日の格好も最高にキュートでセクシーよ」

カレンが嬉しそうに、ニコニコしながら言った。

「ありがと、カレン」

「さっきから、横を通る店員がずっとひなたを見てる」

そう言われ、ひなたはギクリとして、ソファから足を下ろした。でもカレンは、口を尖らせて「違いわよ」と言いつつ。

「あれは足を乗せるなって意味じゃなくて、賞賛の眼差し。ひなたは自然にしているだけで、目の保養だもの」

普通なら褒めすぎだと否定するところだが、ひなたはカレンの言うことは基本、素直に受け取ることにしている。

彼の勤めているサロンは、青山に本店のある有名店。トップスタイリストになると、一般の客よりはモデルやアイドル、タレントなどのスタイリングを手がけるようになる。

カレンはまだアシスタントだが、それでも日常的に有名人を目にしているせいか、その辺りの見立ては厳しい。美に対する目が厳しく、誤魔化しや謙遜をとりわけ嫌う。ひなたの格好やメイクも、ダメな時はダメだと言うし、もつとこうしたらいいというアドバイスも的確だ。

「ねえ、カレン。せっかくの金曜日だけど……ちよつと仕事のことを愚痴つてもいい？」

ひなたが切り出すと、彼は目を見開き、意外そうな顔をした。

「なんかあったの？ ひなたがそんなこと言うの珍しいね」

「私ね、秘書室に異動になっちゃったの。それもフランス人専務の第二秘書、なの」

カレンはギョツとした様子で、「わぁお」と呟いた。

ひなたは心底嫌な顔をし、ふたたびソファの上に足を上げて膝を抱える。

「専務は傍にいないことのほうが多いから、まだいいの。でも同じ人に付いてる先輩秘書がね……気付いてるみたい」

カレンは目を丸くした。

「ひなたの擬態に？」

彼女は頷き、抱えた膝の上にあごを載せて、ため息を吐く。

「前髪とメガネをなんとかしてこいつて。嫌だつて言ったら『TPOって知ってる？』とか言われて」

「それはそれは」

カレンは肩をすくめて、苦笑いした。

ひなたは「まだあるの！」と言って、拳をキュツと握りしめる。

「その人、海外勤務が長いみたいで、身近なスタッフは名前で呼ぶのが普通だとか言って、いきなり呼び捨てにしてくるんだよ？ しかも自分のことも『颯介』って呼べとか言い出すし。ここは日本だよ！ 先輩社員を下の名前で呼ぶとか無理だし。ほんとTPOとか言う前に、空気読んでほしい！」

「えっ」

カレンが顔色を変え、テーブルから身を乗り出す。

「颯介って。その先輩、男なの!？」

ひなたは一瞬だけキョトンとし、また憂鬱な表情に戻って頷いた。

「しかも社内で有名なエリートなの。いつも一緒にいるから、私に対する周りの視線が痛くてツライ」

「そりゃ大変だ……。で、髪は切るの？」

カレンが問いかけると、ひなたは顔を上げて、首を横にブンブン振った。

「絶対切らない！ そんなことしたらますます目立つし、ファンに虐められる」

「ファン？」

「宮村颯介ファンクラブ。秘書室の別名なの」

それを聞いて、ひなたの心労がどういふものか想像がついたのか、カレンは心から同情する視線をこちらに向けた。

週明けの月曜日。

秘書室の部屋の中は、専任秘書と、グループ秘書の島に分かれている。

デスクワークをしているメンバーの大半はグループ秘書で、専任秘書たちはそれぞれの重役に付き、席を外していることのほうが多い。

ひなたは人がほとんどいない専任秘書の島の自分のデスクで、先週末頼まれた、フランス語の資料を英語に翻訳する作業を進めていた。

でも背後に立ち、こちらをジッと見つめている颯介の存在が、気になって仕方ない。

「ひなた。そんな前髪じゃ、前が見えなくなかないか」

「……作業には、支障ありません」

無視するわけにもいかず、ボソボソと返答する。すると、彼は苦笑いして、小声でささやいた。「せっかく美人なのに……隠す意味がわからない」

ひなたは全身をビクツとさせ、颯介を睨みつける。

「そういうこと口にするの、やめて下さい」

怒るひなたの声は小さく、震えていた。

「なにが怖いの？」

颯介の単刀直入な問いかけに、ひなたは顔をしかめて、うつむく。“答えたくない”という意思表示だ。

手が止まってしまったひなたを見て、颯介はため息を吐き、彼女の背中を優しくポンと叩いた。

「悪かった。俺が一番邪魔してるな」

（気付くのが遅いよ！）

ひなたは自席に戻る颯介を恨めしく思いながら見送った。その直後、背後から突き刺すような視線を感じて、ふたたび下を向いてしまう。

今はまだ仕事を基礎から教わっている最中。異動してきてから、颯介はずっとひなたに張り付いている。そのせいか、颯介ファンクラブの女性たちの視線は、日に日に鋭さを増していた。

「あ、そうだ。ひなた、パスポート持ってる？」

ふいに颯介が自席から声をかけてきたので、ひなたは顔を上げた。

（パスポート……？）

彼女はその場で立ち上がり、彼に向かって首を横に振って見せる。

「取ったことないです」

「早急に取りに行つて。もう、今すぐ行つてきて」

（今すぐ？）

ひなたが目を丸くすると、颯介は事もなげに言い放つ。

「来月からエリックの出張にも同伴してもらおうから。社費で世界中飛び回れるよ」

(嬉しくない……!)

ひなたは愕然としながらも、慌ててパスポートを取るのに必要なものを調べ始めた。

\*

秘書の仕事を舐めていたかもしれない——と、ひなたは思う。

秘書室に異動してきて、半月が経った。

自席に座り、書類を触る仕事だけで済んだのは、初めの一週間だけだ。あとは颯介の（正確にはエリックの）後について回り、一日中座る暇もない。

基本は会議に次ぐ会議。ひなたの仕事は、エリックのスケジュールを管理するのがメインだが、「管理する」なんて一言が、いかに大変かを思い知った。

大きな会議を中心にして、合間に小さな打ち合わせの日時を調整する。予定をこなしている間にも新たな予定が入ってくるし、逆にキャンセルや、時間と場所の変更もしょっちゅうだ。

参加する会議の資料が揃ったら、エリックと颯介が、会議の進行をシミュレーションしながら互いの意見を聞き、理解に相違がないかをチェックする。

第一秘書である颯介には、エリックが不在の時、彼ならこうするはず、という判断が必要な場面が多い。そのため、頻繁な意見交換は必須だ。エリックは颯介を信頼していて、強引に自分の判断を押しつけるのではなく、彼の意見を尊重している。

ひなたはまだ、颯介のうしろをくつついて回り、言われた作業をこなすだけで精一杯だった。

かなりハードな毎日だが、唯一の救いは、エリックがフランス人なため、夜になると仕事をしないこと。就業時間内に同伴から解放されるため、細かい雑事を二人でこなしてから帰宅しても、さほど遅い時間にはならない。

今日は、社外に出るとなかなか取れないランチタイムを、二十分確保できた。

午後いちの会議の会場近くにあったカフェで、颯介とひなたはカウンターテーブルに陣取って、立ったままクロワッサンサンドにかぶりつき、コーヒーを飲んでいる。

他人全般——特に男性が苦手なひなたでも、ここまで長時間一緒にいると、さすがに少しは慣れてくる。最近では颯介に対して、不必要に身構えることはなくなった。

「なあ、ひなた。その前髪はまだどうにかする気にならない？」

この半月で数回目の質問。ひなたの答えは同じだ。

「嫌です」

「なんで」

いつもならここで黙りこくってしまうところだが。

「顔……見せたくない、です」

初めてそう口にしたら、颯介は意外そうに目を見開き、こちらを見つめた。

「顔のことでなにか、嫌な目にあった？」

質問の体だったが、確信しているような口調だった。ひなたはなんと行っていいかわからず、小

さくコクリと頷く。

「やっぱりそうか。でもさ、ひなた」

一度言葉を切り、こちらの目をジッと覗き込む彼を、ひなたもおおずとお見つめ返した。

彼は真面目な表情に、優しい眼差しで続ける。

「確かに隠すのも方法の一つだけど、容姿は強力な武器にもなる。どうせなら胸張って、正面から戦ったほうがよくないか？」

ひなたは擬態を始めてから、色々な人に似たようなことを言われ続けてきた。

元々自分を知っていた人からは「もったいない」とか、「隠す必要なんか無い」と。知らない人からも「もう少しおしやれしたら」とか、「ちゃんと顔を出しなよ」と。

あえて隠しているひなたからすれば、余計なお世話でしかない言葉。

でも今、ひなたは初めて、その言葉の意味をちゃんと考えてみようかと思った。なぜなら、目の前に立つこの人は、自身の言葉を体現していると思えるから。

（容姿は強力な武器——）

男性に対する形容としては、あまり相応しくはないかもしれないが、ひなたは颯介をとても美しいと思う。全身のバランスや姿勢、動きやちよつとした仕草も、落ち着きがあつて無駄がなく綺麗だ。

男性らしいキリリとした眉に、切れ長の目。通つた鼻すじに、薄めの唇——各パーツの配置や、バランスも整っている。柔らかそうな髪を、整髪料でうしろに流し固めているが、いく筋か落ちた前髪が色つばい。

特に、目に強い光を湛え、自信ありげに微笑んだ時は、その華やかな雰囲気にも圧倒された。

忙しい時の厳しい表情は少し冷たい印象だが、ふいに笑顔に変わった時は、周りの女性の頬が一樣に染まる。彼女たちの目にハートマークが浮かぶのがハッキリとわかるくらいだ。

「でも、戦うって……具体的にどうやったらいいかわかりません。こんな風に隠す前は、見た目のせいでトラブルに遭つてばかりだったし」

颯介は彼女を見つめたまま、軽く目を見開く。

「そんなに綺麗なんだ。——メガネ、取つて見せてくれない？」

ひなたは、颯介のお願いに驚いて、目をパチパチ瞬いた。擬態を見破っているのだろうに、なぜ今さらそんなことを言うのか。

「私の顔に気付いてたんじゃ……？」

「うん。でも、ちゃんと見たことないから。見たいな。ダメ？」

（なにその口説くみたいな言い方！）

ひなたは不覚にもドキツとして姿勢を正し、彼を軽く睨みながら、首を横に振った。

「嫌です」

「まあいいや」

颯介はあっさりと引き下がりが、わざとらしく肩をすくめる。

「来週は三日間、ニューヨークだ。出張先ではいつもの地味なリクルートスーツは禁止だからね。なにを着てくるか、楽しみにしてるよ」

そう言ってニヤリと笑った颯介は、腕時計を指して「時間だ」と言った。素早く仕事モードの顔に変わり、立ち上がる。

ひなたも急いでコーヒーを飲み干し、一緒に店を出た。

彼のスラリとしたうしろ姿を追いかけながら、彼女は今まで感じたことがない、不思議な高揚感を味わっていた。

\*

颯介から「地味なりクルトスーツは禁止」と言われ、ひなたは悩み、カレンに電話で相談した。その週の金曜日。彼に付き合ってもらって買物に出かけ、着回しがきいてシルエットが綺麗な質のよいセットアップを二着と、ブラウスやカットソーを購入する。

カレンの仕事では、普通のOL向けにコーディネートをする機会は逆に少ない。だから、彼にも「楽しい！」と言ってもらえて、ひなたはホッとした。

「殻を脱ぐ気になったの？」

そう聞かれ、ひなたは苦笑する。

「仕事上、仕方なく」

「へえ」

カレンはふふつと微笑んだ。

「いいんじゃないかな。強制的にリハビリさせられてる感じね」

「ねえカレン。私を見た目って……武器になるのかな」

すると彼は目を丸くし、「どうしたの!？」と、勢いよく食いついてきた。

「ひなたがそんなこと言い出すなんて！ すごいわ……。武器にならないって思ってた、ひなたの天然ボケもすごいけど」

(天然ボケ?)

顔をしかめると、カレンは感心したように「ふーん」と呟く。

「もしかして、例の先輩に言われた？」

ひなたは小さく頷き、ふと颯介の整った顔や、姿勢のいいうしろ姿を思い出す。

「その人は、まさに自分の見た目を最高の武器にしてるって感じ。でも私には、なにをどうしたらいいかわからないの」

カレンはふたたび目を丸くし、口をポカンと開けた。

「ひなたは、自分が人にどう見られてるか、本当にわかってないのね」

それはまさに、ひなたのコンプレックスの原点だ。無自覚な態度が、中学生の頃の事件を引き起こしたのだと思うと怖い。

それでも逃げずに人と向き合っていれば、なんとなくでも自分の存在がどのようなものか、掴めたのかもしれない。でも、ひなたは今まで——現在に至ってもなお、人と向き合うことから逃げ続けている。

「少しづつでいいから、そのままのひなたを表に出していくしかないんじゃない？ それを周りがどう受け止めるかで、これでいいとか悪いとか判断するしかないと思う。あの時と違って周りだつて、もう大人なんだから」

カレンの言葉を、ひなたはゆつくりと嘸みしめて、後から幾度も思い出した。

\*

週が明けてすぐ、初めての海外出張。ひなたは極度に緊張したまま、当日の朝を迎えた。空港に着き、待ち合わせに指定された、チェックインカウンターを見つめる。フロアの入り口近くに立っている颯介に気付き、ひなたは背後から声をかけた。

「おはようございます、宮村さん」

振り返った颯介は、驚いたのか、軽く目を見張る。

今日、ひなたが着ているのは、柔らかいフォルムの白いカットソーに、明るめのグレーのフレアスカートだ。スカートと同生地ジャケットも、シンプルだが短めの丈の、若い女性らしいシルエット。彼に言われた通り、ひなたはリクルートスーツをやめ、きちんとしているが女性らしい印象を与える格好をしている。

颯介はすぐに嬉しそうな顔をして、優しく挨拶を返した。

「おはよう、ひなた」

対するひなたは、緊張のあまり上手く表情を作れず、強張った顔をしている。

それに、目ざとく気付いた颯介が訊ねた。

「どうしたの？」

ひなたは不安も露わに、彼を見上げる。

「ひ……飛行機に乗るの、初めてなので」

颯介は驚きに目を丸くした。

「海外に行くのが初めてなだけじゃなく、飛行機も？」

ひなたは素直に頷き、周囲をキョロキョロ見回した。そして、ジャケットのポケットから、折りたたんだ小さな紙を取り出す。

「まずはチェックイン……それからセキュリティチェック」

彼女は、飛行機の乗り方を調べて書いてきたメモを見ながら、ブツブツ呟いた。だが、チェックインカウンターと書かれた場所はいくつもあり、どこへ行けばいいのかわからない。

「これ、どうすれば……」

颯介は、しばらく黙って様子を見ていたが、堪えきれずにクククと笑い出した。

「ひなた、なんで俺に聞かないの？」

「えっ」

肩を震わせて笑う颯介に気付き、ひなたは恥ずかしくて、目を逸らした。

「だって……自分でできることは、やらなきゃと思って」

颯介はフツと笑って近付き、ひなたの頭を優しくポンポンと撫でる。

「意欲は買うけど、今日はいいよ。初海外、初飛行機なんだから、おとなしくついてきな」

「……はい」

ひなたは内心ホツとして、ようやく肩の力を少し抜いた。

薄いグレイッシュピンクのキャリアバッグを不器用に転がしながら、ひなたは颯介の後を必死で追いかける。

彼は時折振り返り、こちらの様子を見ては、可笑しそうに笑う。でもいつもより、だいぶゆつくりと歩いてくれていた。

出国審査が終わり、出発ゲート前に到着して初めて、ひなたは気が付いた。

(そういえば、エリックは?)

肝心なボスの姿を、今日はまだ見かけていない。

「宮村さん! あの、エリック……」

颯介は、搭乗カウンター前の椅子を指し、ひなたに座るよう促した。そして、スマホでメッセージを打ちながら「大丈夫だよ」と言う。

「ラウンジにいるから。しばらくしたら、ここに来る」

エリックはファーストクラス、颯介とひなたはビジネスクラスの席を取っている。

チケットの手配をする時、ひなたはエコノミーじゃなくていいのか、気になって訊ねた。

「エコノミーにすると色々な手続きが遅くなって、エリックを一人で待たせることになるから」

颯介はそう言い、「気にすることないよ」とささやいた。

ファーストやビジネスと比べ、エコノミーは手続きに格段に時間がかかるそうだが、なるほどと思いつつも、ひなたはビジネスとエコノミーの価格差を見て驚く。

(自分じゃ絶対に乗れない)

仕事とはいえビジネスに乗れるのだから、色々ちゃんと覚えておこうと、その時ひなたは思った。

『颯介! ひなた!』

背後からよく通る声が響き、ひなたは慌てて椅子から立ち上がる。

振り返ると、背の高い金髪の年配男性——エリックが、颯介と歩いてくるのが見えた。

近付いてきた彼は、ひなたを見て目を丸くし、フランス語で捲し立てる。

『ひなた! 君はいつも美人だけど、今日はとてもかわいらしい。服装で、女性は驚くほど変わるね』

エリックはひなたに頬を寄せ、軽くチュッと挨拶のキスを響かせた。

『マンハッタンに着いたらパーティーに出なきゃいけなくなったんだけど、君をエスコートしてもいいかな』

「え、私……?」

思わず日本語で答えたひなたに、エリックはいたずらっぽくウィンクして見せる。

『よかったら、僕にドレスをプレゼントさせてほしいな。着飾ったひなたを見てみたいよ』

どうしたらいいかわからず固まっているひなたの横で、颯介がこちらをジッと見つめていた。『パーティーなんて出たことないので、どうしたらいいか……』

うつむきそうになった彼女の背中を、エリックが景気づけるように、勢いよく叩いた。『ダメだよ、ひなた。君はとつても美しい。君が下を向いていたら、この世から美が一つ減ってしまっよ』

慣れない褒め言葉とスキンシップの連続に、ひなたは内心悲鳴を上げる。

(助けて……)

すると、その気持ちを汲んだかのように、颯介の冷静な日本語が響いた。

「エリック。そろそろ搭乗口が開きます。機内で、この書類だけご確認を」

エリックは残念そうに眉根を寄せ、颯介に向き直る。ひなたは、これ以上なにもされなくて済むことにホッとした。

「それ、飛行機の中じゃないとダメなの？」

「でなければ、迎えの車の中で読んでいただくことになりましたが」

「それはヤダ。車で字なんか読んだら、気持ち悪くなる」

「では、お願いします」

颯介は淡々とエリックに書類の束を手渡すと、なぜかひなたの肘を掴み、彼女を自分のほうへ引き寄せる。

「え？」

「ファーストとビジネスは一緒に搭乗だ。俺たちも行くよ」

「は、はい」

すぐに離された颯介の手の感触が、いつまでも肘に残った。

ひなたは颯介の行動に、なんとなく違和感を覚える。しかし初搭乗に焦って、パスポートと搭乗券を取り出しているうちに、そのことについて深く考えるのはやめてしまった。

——そんな二人の様子を楽しそうに眺めるエリックの視線に、颯介は気付いていたが、ひなたはまったく気付いていなかった。

成田—ニューヨーク(ジョン・F・ケネディ空港)直行便のビジネスクラスのシートは、高い衝立<sup>た</sup>てで各席が仕切られていて、半個室のようになっていた。

ひなたは驚きに目を丸くする。

(なにこれ!?)

「ひなたの席は窓際<sup>まどわ</sup>な。荷物は足元。フライトは約十三時間で、こつちを出発した時間とほぼ同じ時刻に、あつちに着く。つまり午前中に出て午前中に着くから、仮眠を取らないと午後が辛いぞ」

「わあ」

「シートはフルフラットだから……って、おい、聞いている？」

ひなたはシートの前で立ち尽くしたまま、口をポカンと開けていた。

「すごい……本当にここに座っていいんですか？」

「他のどこに座るつもり？」

自分の荷物を柵にしまい終わった颯介は、からかうような口調でそう訊ね、ひなたを見つめる。

「そ、そうですね」

目が合い、ひなたは急に恥ずかしくなって、うつむいた。

(興奮しすぎ)

荷物を所定の場所に置き、ひなたはシートに座って周囲をじっくり観察する。

(嘘、これテレビ？ 大きい！ このリモコンはなに？)

キョロキョロそわそわしていたら、斜めうしろからまたクククと笑い声がした。

振り返ると、そこに颯介が座っていて、二人の席の間は開閉式のパーティションで繋がっている。

箱型の座席は前後に少しずつずらして配置されていた。ちょうど、ひなたの身体の横に、颯介の足がくる感じだ。

「そこを閉めるのは、離陸後だよ」

彼はそう言いながら背広を脱ぎ、ネクタイを外して襟元を緩める。

「離陸したらウェルカムドリンクが来る。食事をしたら、しっかり昼寝しておけよ」

「はい……」

颯介の言葉にうわの空で返事をし、ひなたは、ぼうつとしながら彼の姿を見つめた。それに気付いた颯介が、怪訝な表情を浮かべる。

「どうした？」

ひなたはハツとして、首を勢いよく横に振った。

「なんでもないっ、です」

そう言っ、焦りながら前を向く。

颯介は不思議そうな顔で覗き込んできたが、ひなたは気付かないフリをして、反対側の窓を向いた。赤く染まっているであろう頬を見られないように。

(急に脱ぎだすから、びっくりした)

ひなたはネクタイを外した颯介の、首すじから鎖骨にかけての男性的で綺麗なラインに思わず見惚れてしまったのだ。そして、そんな自分に気付き、とてつもなく恥ずかしくなった。

(やだもう……気付かれなかったよね?)

そんなことを考えていたと知られたら、恥ずかしさで死ぬるかもしれない。

(ただでさえ役立たずのお荷物なのに)

ひなたは、今の職務は自分には分不相応だと感じている。

そもそも颯介が有能過ぎるのだ。自分が彼の助けになれているとは、とても思えない。

毎日エリックが帰った後にスケジュールの確認をし、次の日の会議資料を準備したら、颯介から『帰っていいよ』と言われる。でもひなたは、彼がその後も遅くまで仕事しているのを知っていた。毎日帰宅はしているのだから、おそらく家にも仕事を持ち帰っている。でなければ説明のつかない量をこなしているのだ。

(フランス語だって、別に私がいなくても困らない)

颯介だって、日常会話程度は聞き取りできている。たまに空いた時間に教本をめくり、フランス語の勉強を続けていることも知っていた。日々上達もしているのだから、エリックとのコミュニケーションも増々円滑になるだろう。

ひなたは、せめて颯介に指示されたことは精一杯やろうと思っっている。でも人の目を怖がっている自分では、期待に十分応えられる自信がない。

エリックに言われたパーティーの同伴だってそうだ。着飾って人前に出るなんて自分には――

ひなたはハツとして振り返ると、パーティーションに両手をかけ、タブレットになにやら打ち込んでいる颯介に呼びかけた。

「宮村さん！」

「ん？ どうした」

「あの、ドレスとかパーティーって、どうしたら……」

颯介は手を止め、目を丸くして、ひなたをジッと見つめる。

「どうしたらって、出る気になったって意味？」

「いえ、そうじゃないんですけど」

口をへの字にし、困った顔をするひなたを見て、颯介は苦笑いした。

「あっちに行ったらさ、ひなたの知り合いて俺とエリックだけだよね」

颯介がなにを言いたいのかわからず、ひなたは首を傾げる。

「……はい、そうです、ね」

手元のタブレットをテーブルに放ると、颯介はひなたに向き直り、彼女の目をまっすぐ覗き込んで言った。

「俺もエリックも、ひなたが実は美人だってことはもう知ってるんだから、いいんじゃない？ ニューヨークにいる間だけは、堂々と顔見せなよ」

「えっ」

ひなたは思いもよらない提案に驚いて息を呑む。

(ニューヨークにいる間だけ？)

「過去にどんなことがあったかは知らないし、話さなくていいけど。エリックも俺も、ひなたを傷付けるようなことはしないよ。信用できない？」

颯介は真剣な眼差しで、ひなたを見つめた。

(少しづつ……そのままの私を表に出していく)

カレンにも言われたことだ。

颯介の言う通り、ニューヨークでなら大丈夫かもしれないと、ひなたは思った。様々な人種が溢れかえる国で、自分を気に留める人間は、そう多くはないだろう。

それに、出張の間は常にエリックと颯介の二人が、傍にいてくれる。

ひなたは一つ深呼吸をすると、小さく頷いた。

「ニューヨークにいる間だけ、なら」

ひなたのささやかな決断に、颯介は満面の笑みを浮かべる。

「大丈夫。いつも隣にいるから、心配するな」

そこで、ゴオツという大きな音と共に、飛行機のエンジンがかかった。機体が揺れ、滑走路に向かつて移動を始める。

ひなたは驚きに目を見張り、周りをキョロキョロ見回した。

「う、動いてる……!!」

「そりやそうだ」

颯介は可笑しげに笑って言った。

「生まれて初めてのフライトか。ひなたの記念日だな」

ひなたもシートベルトを締めながら前を向き、颯介が先ほど口にした言葉を反芻する。

『大丈夫。いつも隣にいるから、心配するな』

それは不思議なほど心に沁みて、その後ずっと、ひなたの胸を熱く震わせ続けた。

\* \* \*

ひなたつて変わつてる——颯介は初めにそう思った。

女つて普通は少しでも綺麗に、もつとかわいくなりたいと努力する生き物じゃないのか？

少なくとも颯介の周りにいる女たちは皆、化粧や服装、アクセサリー、髪や爪の手入れ、カバンに靴に香水と、美を追求することには余念がない。よくもまあ、それだけ手間をかける時間がある

ものだとは思うが、そうして美しく着飾った女性は、決して嫌いじゃなかった。

颯介は、女は綺麗であるに越したことはないと思っている。

だから、ひなたを見るとなんだかモヤモヤした気持ちになった。

(せっかく綺麗に生まれついたのに、なんでわざわざ隠そうとするんだ?)

颯介が専任秘書の仕事に就いて数年経つが、エリックは二人目の上司だ。

ただでさえ面倒なスケジュール管理に加え、彼は自分の仕事のうち、颯介が肩代わりできるものは遠慮なく振ってくる。

信頼してくれるのは光栄だし有難いとも思うが、そろそろ荷が重いなと思いはじめていた。

スケジュール管理と書類整理、出張手配くらいは任せられる秘書を、もう一人付けてほしい——そう言ったら、エリックはフランス語を話せる者ならば増やしてもいいと、条件を付けてきた。

調べてみたら、社内にフランス語を話せる人材は数人いた。だが、細かい条件が合わない。

颯介より歳も役職も上だったり、海外窓口で重要な職務に就いていたり。話せると申告されていても、実際にはカタコトだったりした。

これは新たに雇うしかないかと思つたが、いまいち信頼性に欠ける。

外部で有能な人材を探すのは、大量の砂の中から小さな金粒を見つけたようなものだ。ふるいにかける手間が膨大だし、たとえ見つかつてても、有能であればあるほど、こちらに求められる条件は厳しい。そういう人材は、よそからも需要があるからだ。

だからひなたを見つけた時は、まさに金の卵だと思つた。

自社の社員なら入社試験で基礎学力は保証されているし、まだ若いから使いやすい。すでにフランス語を話せるなら、あとは多少のビジネス用語を追加で覚えるだけで、かなり実用的なレベルに仕上がるはずだ。

だが、本人に少々問題があった。野暮<sup>やぼ</sup>つたい見た目と極度の人見知り。

見た目は後からなんとでもできると思ったが、円滑<sup>えんかつ</sup>なコミュニケーションが図<sup>はか</sup>れないのは痛い。

一から鍛え直<sup>きた</sup>すつもりでいたが、働<sup>はたら</sup>きだしてみると実はそうでもなかった。

まだまだこちらの理想にはほど遠いが、徐々に慣れてきたのか会話が成立するようになった。業務に関する伝達などは、むしろ驚くほどスムーズだ。

言われたことはパツと正確に理解するし、敬語もきちんと使える。指示されたことはさつさとやるし、わからないことはちゃんと聞く。

人と対峙<sup>たいじ</sup>してなにかをする場合を除き、ビジネスの基本はちゃんと身につけていた。

驚いたのは、電話だとよくしゃべること。

対面だと、仕事以外の話題の時は、下を向いて貝のように口を閉じている。でも、電話で話す時にそれとなく雑談を振ってみると、意外と普通に答えが返ってきて面白。

あとは見た目をどうにかして、面と向かって話すことに慣れてくれれば、パーフェクトだ。

あの野暮<sup>やぼ</sup>つたい見た目を変えさせる、いきつけかけがあればいいのに——颯介はずっとそう思っていたのだ。

機内での食事が済んですぐ、颯介はタブレットで、メールと会議資料を確認していた。すると、いつの間にか隣が静かになっている。

少しだけ身体を起こし、開いているパーティションの隙間<sup>すきま</sup>から隣を覗<sup>のぞ</sup>き込んだ。見ると、ひなたはフラットにしたシートで、スヤスヤ眠っている。

(閉め忘れたか)

颯介がパーティションを閉めようとしたら、背中を向けていたひなたが寝返りを打った。

(あ……)

彼女はメガネを外しており、前髪は横に流れている。そのせいで、彼女は整った素顔を無防備に晒<sup>さら</sup>していた。

颯介は、ほうつと驚嘆<sup>きょうたん</sup>のため息を吐く。

(本当に綺麗だ)

白くつるんとした肌に影を落とす長いまつげ。スツと通った鼻すじに、ふっくらとした柔<sup>やわ</sup>らかそうな唇。

おそらく化粧はしていないだろう。それでも、ひなたは十分に美しかった。

(スリーピングビューティ——「いばら姫」か……)

颯介は無意識に微笑むと、静かにそっとパーティションを閉めた。

約三時間ほど眠ってスッキリしたひなたは、到着予定時刻の一時前まで映画を観たり、本を読んだりして過ごした。

隣からは、颯介がずつと眠らずに仕事をしている雰囲気伝わってくる。

ひなたは一度だけ『なにかできることありますか?』と声をかけたが、『いいから休んでな』とお断りされてしまった。

(本当に役立たずだな、私)

また少し落ち込んだが、寝る前に颯介と話したことを思い出し、ハツとした。

(そうだ、化粧品とコンタクト!)

ニューヨークにいる間は、顔を見せると決めたことを思い出す。

いつもほぼスッピンに近いが、念のため化粧ポーチやコンタクトは持ち歩いていた。

(普段のお出かけメイクじゃ濃いよね。ビジネス向けって、どのくらいがいいのかな)

メイクすることや、おしゃれ自体はやっぱり好きだと思う。そのまま外に出ること——つまり、他人に見られることだけが苦手だ。

ひなたはフラットにしていたシートを戻すと、バッグを開けてポーチを探した。

たまに通路を歩く キヤビレンディング C A を見ても、メイクをジッと観察する。

(あれはちよつと濃い……? でも秘書室の人たちも、あれくらいかも)

悩んでも答えが出なかったひなたは、颯介に聞いてみることにした。

閉めていたパーティションを軽くノックして、声をかける。

コーヒーを飲んでいた颯介は、パーティションを開け、ひなたを見て目を丸くした。彼女は前髪を上げてボンパドルにし、メガネを外している。

「あの、ちよつとあそこのC Aさんを見て下さい」

颯介は言われるまま、ひなたが指した先にいるサービス中のC Aを見た。

「あの人のメイク、どうですか? あれはちよつと濃い気がするんですけど……秘書の場合、あれくらいでも普通でしょうか?」

颯介は、驚いた顔をして言った。

「ひなたって……」

「え?」

「化粧とか、着飾るのが嫌いなわけじゃないんだな」

彼は意味深に笑い、ふいに顔を近付けると、ひなたの耳元にそつとささやいた。

「そのままでも充分綺麗だ。やつと、メガネを外した顔を見た」

それは、これまで聞いたことのない、とても甘い声——

ひなたはドキッとして、同時にハツとし、今の自分の状態に気付いて顔を熱くした。慌てて、彼に背中を向ける。

(見られた！ しかもスッピンを)

「ひなた」

背後から颯介に呼ばれ、ひなたは熱い顔のまま、躊躇ためらいがちに振り向く。

「あれぐらいの濃さがギリギリかな。もっと薄くても、ノーメイクでも構わないよ」

「わかりました……ありがとう、ございます」

颯介は微笑みながら、パーティションを閉めてくれた。

(恥ずかしすぎる！)

ひなたは、ハアと大きなため息を吐き、なんとか気を取り直して、ふたたび鏡に向かった。

長いフライトを終え、飛行機を降りる。

ひなたは、どうにか化粧を終え、髪を下ろして整えた。

ロビーで顔を合わせたエリックは目を見開く。両手を広げて荷物を放り出し、「ひなた〜！」と

呼びながら駆け寄ってきた。

颯介が慌ててエリックの荷物を確保し、しかめ面つらで戻ってくる。

その間に、ひなたはエリックに手を握にぎられ、フランス語でこれでもかというほど愛の言葉をささやかれた。

『なんて愛らしいんだ、ひなた。君は美しいだけじゃなく、とてもかわいらしい。ああ、僕が結ゆい子と出会う前だったら、僕の愛のすべてを君に差し出すことができたのに』

『結子さんって……奥様ですか？』

ひなたは自分の作り笑いが、さらに引きつるのを感じる。

『そう……結子は僕のアプロディーテだ。ひなたの拾ひろってくれたカフスも、結婚二十周年の記念に彼女からもらった大事なものだっただよ』

フランス語での応酬おうしゅうに、颯介が呆あきれた顔をして、日本語で口を出した。

「そんなに奥様が大切でしたら、いい加減ひなたから手を離して下さい」  
するとエリックがニンマリ笑い、颯介に向き直って言う。

「ヤキモチかな、颯介？」

「は？」

「こんなに愛らしいひなたを独占したい気持ちはわかるけど、ひなたのボスは僕だからね」

颯介は眉根を寄せてため息を吐き、エリックに彼のスーツケースを手渡して言った。

「わかりましたから。車が待ってますので行きますよ」

エリックの怒涛どとうの愛のささやきから解放され、ひなたはホッと胸を撫なで下ろした。

「大丈夫？」

颯介が心配そうに窺うかがい、ひなたは慌てて彼を見る。

「はい、大丈夫です」

「行くよ。はぐれないようについてきて」

見た目が変わっても、颯介の態度は、いつもとまったく変わらなかった。

ひなたはそのことに安堵し、下ろした髪をなびかせながら、彼の背中を追いかけた。

\* \* \*

迎えの車に乗り、空港からマンハッタンの市街へと移動する。

颯介とエリックが後部座席に、ひなたが助手席に座っている。

その車中で颯介は、ひなたが聞き取りできない中国語でエリックに話しかけられた。

『どう説得したの』

『……彼女ですか？』

『なにかトラウマがあつたんでしょ。どんなに美しいと褒めてもまったく喜ばないし、むしろ自分の顔が嫌いみたいだったのに』

颯介は、エリックの慧眼にいつもながら感心する。

『着飾ることそのものは嫌いじゃないようです。ニューヨークにいる間だけと条件を付けたら、なんとか承諾してくれました』

『それはつまり……僕たちは信用されている、ということ？』

『おそらくは』

するとエリックは大いに不満げな顔をした。

『男が若い女性に信用されたら、おしまいだ！』

その台詞に、颯介はまた深いため息を吐く。

『なあ颯介、ひなたをどう思う』

『どう、とは？』

エリックは意味ありげに笑い、助手席でこちらを振り返った彼女に、微笑みかけた。

『一人の女性としてだよ。彼女はとても魅力的だと思わないか。見た目もそうだが雰囲気がいいね。』

真つ白くて純真な……』

颯介も、ひなたをジッと見つめながら答える。

『危なっかしいと思います。いつもなにかに怯えている。俺にはようやく慣れてくれたようですが』

『心配？』

『まあ……そうですね』

『いい傾向だ』

颯介が怪訝な表情を浮かべると、ひなたがおそるおそる話しかけてきた。

『あの……もしかして、私の話ですか？』

咄嗟に颯介は「違う」と言いそうになり、だがそれより早く、エリックが笑顔で答えた。

『そうだよ、ひなた。君がいかに愛らしいかについて、颯介とこっそり話し合っていたんだ』

『エリック……』

颯介が困惑して眉間にシワを寄せると、それを見たひなたは、なにを思ったのか、肩を落として

前を向いた。

「お邪魔してすみませんでした」

颯介は焦って、またしても「違う！」と声を上げそうになったけれど、それをグッと堪えた。

\* \* \*

支社はニューヨーク市マンハッタン区の外れにある。車はビジネス街の一角に建つ高層ビルの車寄せに入っていた。

入り口にはアジア人数名とおそらく米国人だと思われるスーツ姿の男性たちが迎えに出ている。

ちょうどその前で車は停まり、助手席のひなたと後部座席の颯介は、ほぼ同時に車を降りた。そして最後にエリックが降りる。

迎えの男性たちは一斉に近付いてきて、エリックに深々と頭を下げた。三人は案内されるまま、ビルの中へと入っていた。

ひなたは颯介の後について歩く。途中、何人かの社員らしき人たちとすれ違ったけれど、おいていかれないように歩くのに必死で周りを見る余裕はなかった。

しばらくすると、彼が振り返って言う。

「ひなたの顔、威力あるなあ」

「は？」

「すれ違う男がみんな振り返って。美貌は万国共通だっていうけど、本当なんだな」

ひなたは緊張で颯介の背中しか見てなかったから、驚いて目を丸くし、周囲を窺った。

「あの……CMOの同伴だからでは？」

首を傾げるひなたに、颯介は苦笑いする。

「ここには何度も来てるけど、こんなに見られたことないよ」

そう言われてしまうと、ひなたは急に周りの視線が気になり始めた。知らず知らず肩をすくめ、下を向いてしまう。

颯介は歩調を緩め、ひなたの横に並んだ。そして、彼女の背中をポンと叩いて、耳打ちする。

「ひなた、うつむくな。若い美女が弱ったところを見せるのは、男に襲ってくれて言ってるのと同じだ。加虐心をそそるだけ。顔上げて胸張って、もし目が合ったら微笑んでやれ。そうすれば、大抵の男は、お前の言いなりだ」

(顔を上げて、胸を張る……)

ひなたは、颯介が以前言っていた「戦い方」を覚えてくれているのだと、理解した。

大きく息を吸い、言われたように視線を上げ、まっすぐ前を見る。

前方から歩いてきた若い男性が、ひなたを見て驚き、頬を赤くした。彼がぼうつとしているのを横目に見てから、ひなたは颯介と目を合わせる。

微笑みかけると、颯介は軽く目を見張った。そして、フツと苦笑いして目を逸らし、前を向く。

「お前……俺を下僕にするつもりか？」

ひなたは驚き、「可笑しくなって笑ったら、颯介におでこを軽く叩かれてしまった。こんな風にして、ひなたの初海外出張は幕を開けたのだった。

\*

マンハッタンでの滞在予定は三日間。

初日と二日目は、会議に次ぐ会議だ。三日目の午後は、エリックの旧友のパーティーに顔を出す。それが終われば空港に向かい、夜の飛行機に乗って帰国である。

滞在二日目、三人で行ったランチミーティングの後。エリックが、ひなたと颯介に言った。

「明日の午前中は、市内観光とドレスの調達に行っておいでよ」

ひなたは隣に座る颯介の横顔をそっと窺い見る。彼はコーヒーを手に「わかりました」とすんなり頷いた。

会議資料の確認や事前の打ち合わせはほとんど終わっていて、三日目はエリック一人でも、さほど支障がないと説明される。

(でもそれって、二人で出かけるってことだよ)

半日、宮村さんと二人きり――

いつもの残業や、ここへ来る時の飛行機の中だって、ほぼ二人きりに近い状況だった。でも仕事と昼間の市内観光では、意味がだいぶ違う気がする。

(まるでデートみたい)

ひなたが戸惑いを隠せないままエリックを見たら、彼はニコニコしながら颯介に向かって、「ひなたを最高にかわいく仕上げてね」などと言っていた。

話はそのままに午後の会議に突入し、ひなたは、なんとなくソワソワした気分で、過ごすことになった。

その夜。食事を終えて宿泊先のホテルに戻ると、ひなたは颯介からホテル上階にあるバーに誘われた。そこはルーフトップバーといって、煌びやかな夜景が見渡せる屋外スペースになっている。

案内されたのは、ローテーブルを挟んで、一人掛けのゆったりしたソファが二つ置かれた席。

「ひなたは、酒呑めるの？」

席についてすぐ颯介に聞かれ、ひなたは首を傾げた。

「呑んだことがないので……」

颯介は顔をしかめ、「一度も？」と確認する。

ひなたが頷くと、彼は呆れたようにため息を吐いた。

「歓送迎会とか飲み会は？」

「全部欠席です」

「そうか……まだまだ課題が多いな」

(課題?)



(私、宮村さんの前で無防備になってる……?)

颯介をじっと見ていたら、彼はそれに気付いて顔を上げ、こちらの視線を、くすぐったそうに手で遮った。

「そんなに、見つめないでくれる?」

「あつ、ごめんさい、私……」

慌てて下を向き、縮こまるひなたに、颯介は苦笑いしながら言った。

「違うよ、ひなた。嫌な訳じゃなくて……その、変に誤解しそうになるから」

(誤解?)

おそろおそろ顔を上げると、颯介はちょうど通りかかったウェイターを呼び、メニューを見ながらカクテルを二つオーダーした。

そうしてメニューを閉じ、彼はゆっくり振り返って、優しく微笑む。

「ひなたは、自分の目の力を知らないんだろう……。その目に見つめられると、男は誰でも魅せられて惹きつけられると思うよ。そして同時に誤解しなくなる。その目に映っているのは、もしかしたら自分だけなんじゃないかって」

(私の目……?)

なんと答えていいかわからず黙り込んでうつむくと、先ほどのウェイターが、透明なブルーと、グリーンがかった色のカクテルを運んできた。

颯介はそれを二つともひなたのほうに寄せ、いたずらっぽく微笑む。

「どっちがいい? どっちも甘くて呑みやすいよ。でも度数は高めだから、一気に呑まないで」

ひなたは、ふたたび顔を上げた。そして、黙って彼を見つめたまま、微笑みを返す。

颯介は少し困った顔をして目を逸らし、軽くため息を吐いた。

「さっきの俺の話……聞いてた?」

(目の話のこと?)

ひなたは静かに頷き、「でも」と切り出した。

「誤解じゃないので。私が怖くないのは……宮村さんだけです」

沈黙が流れ、ひなたは自分がまた答えを間違ったような気がして、不安に襲われた。

ふいに、颯介がひなたの手を取ってテーブルの上に乗せ、強く握りしめてくる。

「え?」

ドクン、とひなたの心臓が大きく跳ねた。

でもそれは、決して嫌な感じではなく、むしろ――

「俺も普通の男だから、心底安心はしないでもいいな」

颯介はそう言っ、ひなたの手を離すと、グリーンのカクテルを手に取り、それを半分ほど一気に呷った。

「でも上司だから、ひなたの信頼を失くすようなことはしないよ。かといって、あんまり無邪気に煽られても困るけど」

(煽る……?)

意味がわからず首を傾げると、彼はまた苦笑いした。

「ひなたは怖くないだけで、俺が好きってわけじゃないだろ。さつき男は誰でも誤解したくなるって言ったのは、手を出してもいいんだと、誘われたと相手に思われるよってこと」

ひなたは、驚いて目を丸くする。

「私、見つめただけで、男性にそう思われるんですか？」

今度は颯介が驚いた顔をし、慌てて補足した。

「いや、見つめ方にもよると思うけど」

(見つめ方?)

「どんな風に見つめたら、そう思われますか？」

ひなたの真剣な問いかけに、颯介は困った顔をする。

「そうだなあ……さつきみたいに、まっすぐ見つめられると、ドキッとされるかな。ついでに微笑まれるとヤバイね」

(ジッと見つめて微笑んだら……)

ひなたは、とても重大なことを教わったような気がした。

(もしかして、あの中学生の事件の時も、そうだったの?)

あの時、先輩とどんなやり取りを交わしたのかは、もう覚えていない。

でも自分が先輩に対してそういうことをした可能性は否定できない——

ひなたは、胸の中で急速に膨らんだ自己嫌悪の気持ちを誤魔化すように、勢いで目の前のグラス

を手に取った。そして、半分ほど残っていたグリーンのカクテルを一気に呑み干してしまう。

「あ、こらっ」

颯介は、自分の呑みかけのカクテルを、しかも注意したのに一気に呑んでしまった彼女を睨んだ。だが直後、ひなたが涙をポロポロこぼして泣きだしたのに気付き、うろたえる。

「ひなた? え、どうした?」

慌てる颯介をよそに、ひなたは下を向いて静かに泣き続けた。

\* \* \*

颯介は、彼女が泣き止むまで、その小さな背中を、そっと撫で続けていた。

しばらくするとひなたの涙も止まり、落ち着いた様子で申し訳なさそうに、こちらを見上げる。

「すみませんでした。泣いたりして……」

涙で潤む大きな瞳を向けられ、颯介の胸は密かに騒がしくなった。

それを意識しないようにして頭の隅に追いやると、颯介はわずかに視線を逸らしながら、ミネラルウォーターの入ったグラスをひなたに差し出した。

「もしかして、ひなたは泣き上戸かな?」

冗談交じりに言うと、彼女の顔にも微かに笑みが戻る。

「いえ……これは、ちよつと昔のことを思い出して。酔ったわけじゃないと思います」

「頭もハッキリしてる？」

そう訊ねたら、ひなたは素直に頷いた。

「はい。泣いたら、スッキリしちゃったかも」

そう言っただけで笑うひなたがとてもかわいくて、颯介は胸を突かれた。

(まずい)

滅多に笑わない彼女の笑顔には、特別な威力がある。

これは部下だぞ——颯介は繰り返して、そう自分に言い聞かせた。

「あの……」

ひなたが、颯介の顔を覗き込みながら首を傾げる。

「ん？」

目を合わせないよう中途半端に顔を向けると、ひなたはブルーのカクテルを、なにやらジッと見つめていた。

「こっちも呑んでみたいんですけど、ダメですか？」

「え、大丈夫？」

さっき泣かれたのが気になり、颯介は躊躇ったが、ひなたは目をパチパチ瞬いてから、ニコリと笑った。

「多分。でも、酔うとどうなるか、私もわかりませんけど」

——この時点で、いつものひなたとは、ちょっと違くと気が付くべきだった。ハッキリとペラペ

ラ喋るし、妙によく笑う。

だが颯介は、それをひなたの言葉通り、単に泣き泣いてスッキリしたからだと思っただけだった。

「いいよ。もう少し呑んでみて、いけそうなら他にも頼んでみようか」

颯介の言葉に、ひなたはパアッと瞳を輝かせると、嬉しそうに頷いた。

それぞれが三杯ほど呑み、颯介が腕時計で時間を確認する。

遅くなってきたから部屋に戻ろうかと言ったら、ひなたは残念そうに頬を膨らませた。

「まだ呑みたい」

(こんなにイケる口だったとは)

颯介は苦笑いし、ひなたが膨らませた頬を指先で軽くつついた。

「そもそも明日の相談をしようと思ってここに連れてきたんだ。忘れてた。どこか行ってみたいところある？」

そう訊ねると、ひなたは目を丸くし、またニコッと笑った。

「なんかデートみたいですよ。私、デートなんて一度もしたことないです」

「デ……」

そんなつもりのもったくなかった颯介は、驚きに目を見開いた。

(なんてことを言いだすんだ、こいつは)

ひなたは身体をフワフワ揺らし、楽しそうに微笑んだ。

「明日は、颯介さんって呼ぼうかな。ますますデートっぽくないですか」

「頼むから、それはやめてくれ」

「なんですか？ 最初に颯介って呼べって、宮村さんが言ったんですよ」

（それはそうだけど、今さらだろ……）

眉間を指で軽く揉み、黙り込んだ颯介に、ひなたは座っている椅子ごとスツと近付いてくる。

「颯介さん、明日の希望なんですけど」

（だから名前で呼ぶなって）

顔には出ていないが、ひなたは完全に酔っ払っていた。

「颯介は顔をしかめながら「なに？」と訊ねる。」

「キス、したい」

「……は？」

適当に聞き流そうとしていた颯介も、これには驚いた。

「なにを言ってる……」

「さっき思い出したんです。昔の嫌な記憶。先輩に襲われた時のこと」

不機嫌な顔をして話すひなたの言葉に、颯介は頭を殴られたような衝撃を覚えた。

（襲われた——？）

「よく覚えてないけど、もしかしたら宮村さんが言ったみたいに、私が無意識に誘っちゃったのか

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

「ひなた……」

立ち読みサンプル  
はここまで

「ありがとう、颯介さん」

この瞬間、颯介は自分の心が完全にひなたに囚われ、絡まり堕ちていくのを自覚した。

(ああ……捕まった)

なんとかして逃げ出そうと思っていたのに――

それから颯介は店を出るよう促し、彼女を部屋の前まで送った。彼女はドアの前で素直に「おやすみなさい」と言つて微笑む。

それを半分残念に思い、半分安堵した颯介は、自分の部屋に帰つても、なかなか寝付けない夜を過ごした。

翌日の朝、朝食の席にスッカリとした顔をして現れたひなたは、昨夜のことをほとんど覚えていないと言う。

「――記憶がない？」

「はい。ちよつとショックで涙が出てきたところまでは、なんとか覚えてるんですが」

(一気呑みする前までか)

颯介は肩を落とし、中途半端なため息を吐いた。

「ああ、そう……」

「私、きつとご迷惑かけましたよね？」

眉根を寄せ、心配そうな顔をするひなたに、颯介は苦笑いする。

「別に大丈夫。夕べはかなり強い酒を呑んだからね」

その割に頭がスッカリしていると無邪気に言うひなたを見て、颯介は誰にも聞こえないほど小さな声で「まいった」と呟いた。

(俺だけ一方的に堕ちたってこと?)

豪華な朝食を嬉しそうに口に運ぶひなたを、颯介は向かいの席で見つめる。そして寝不足でポンヤリする頭を抱え、今度は大きなため息を吐いた。

\* \* \*

朝、顔を合わせた颯介は、なぜかだいたい疲れた顔をしていた。寝不足のようだが、彼は「なんともない」と言い張り、早く支度をして出かけようと促してきた。

いったん部屋に戻ったひなたは、部屋着のつもりで持ってきた私服に着替える。タイトなセーターに短いスカート。その下はタイツと、仕事用に履いてきたヒールを組み合わせた。

(やっぱりデートみたいで、なんだか緊張する)

待ち合わせのロビーに下りると、こちらに気付いた颯介が、目を丸くして言った。

「かわいい、ひなた」

「えっ」